

## 韓國梵鐘の特性と變遷 ―特に日本にある韓國梵鐘を中心に―

韓國 國立中央博物館

崔應天

日本には現在 50 点以上の多くの韓國梵鐘が残っている。その中に統一新羅の梵鐘では常宮神社所藏の蓮池寺鐘(833)、雲樹寺所藏の鐘(8 世紀後半)、光明寺所藏の鐘(9 世紀)、宇佐八幡宮所藏の天復 4 年銘鐘(904)などを始め、合わせて 4 点が知られている。国内に残っている統一新羅の鐘が現在 3 点に過ぎず、特に 9～10 世紀につくられた統一新羅後期の梵鐘がわずか一点も残っていないという点で、この作品たちの重要性は非常に大きい。特に今はなくなった統一新羅 745 年、856 年に製作された梵鐘が長崎にあったことも確認することができ、更に残念である。その他にも韓國にはほとんどない統一新羅末から高麗の初めに至る過渡期的な様相を把握することができ、様式的にも大変重要な作品もかなり多く確認されている。

特に九州地方には、韓國と地域的に近いためか、最多の計 12 点の韓國梵鐘が散在している。九州國立博物館に所藏されている高麗時代の梵鐘は、1989 年新たに甘木市の秋月城址の地下から出土した作品として注目されたことがある。中國、山陰、四國地方には高麗時代の 963 年に製作された照蓮寺鐘を始め、12 点の梵鐘が残っている。その中の住吉神社所藏の梵鐘は全高 142.5cm に達する最大の大きさで、一時日本の國寶にまで指定されたことがある、大変優秀な様式の高麗初期の作品である。近畿、北陸地方には統一新羅の 833 年に製作された常宮神社所藏の梵鐘など、合わせて 13 点の梵鐘が残っており、關東、東北地方には 12 点の韓國梵鐘を確認することができるが、そのなかの 4 点は 1945 年以後渡った東京博物館の小倉コレクションの蒐集品である。

日本に残っている韓國梵鐘を所在地域に確認してみると、九州地方が 10 点で最も多く、その次が京都、山口、大阪地域であり、東京近くの關東地域に行くほどその数が減っていくことがわかる。そして統一新羅と高麗初期の梵鐘の場合、大分縣、島根縣、島取縣、福井縣など主に北部の海岸一帯に集中的に分布しており、その他の梵鐘も大部分が海岸から近い地域に所藏されている点が注目される。同時に大きさにおいても、住吉神社の梵鐘を除いて高さ 70～80cm 内外の中型鐘が多いのは、韓國から鐘を持って行く時に移動しやすい中型以下の鐘を対象にし、海上運搬が容易な海岸に隣接したお寺、神社などに移動したものである。

一方、このような鐘に記録されている日本での追刻銘が 13 世紀から 15 世紀までの例が大多数を占めているのは、韓国において倭寇の被害が最もひどかった時期に多数の梵鐘が日本に渡って行ったことを示唆する。